鍼灸実技講演

私の鍼灸

丸山　衛士
熊本県 鍼灸師

経絡治療の私版です。師は岡部素道先生で、「経絡治療」を主宰されていました。最後の内弟子となり、その後、師が北里研究所付属東洋医学研究所に出仕されましたので、そこに勤務することとなりました。ここでは経絡治療を主体に治療を行っていました。その後帰省し、40 年以上開業しています。

経絡治療を基本にして、脈診で察知した臓腑（経脈）の異常を経脈の異常として、証を決め、その対応する経脈の五行穴を用いて、異常を平均化することにより、生体の恒常性を高めるようにしています。

明治以降、医療の西洋化で、漢方薬や鍼灸、按摩などが軽視され、その免許基準も簡略化されてきていた。患者の来ない日があった話を故大塚敬節先生から聞かされたことがある。その頃（昭和初期)、若手の有志（日本に残る漢方や鍼灸を残さなければいけないと漢方、鍼灸の方々）が『古典に帰れ』のスローガンの基に、近代医学ではなく、滅び行く中国の古典に則った治療を復活させようとされた治療法の一つが経絡治療である。

１）望・聞・問診
２）切診：脈診・腹診・經絡診
３）脈診と腹診により反応した圧痛の点を求め
４）經絡診でその反応が軽減もしくは消失する経穴を尋ねる。
５）脈証と一致すればそれを証とする。

経絡治療は四診により患者の体の特徴を捉え、治療法則に従い、施術してゆくもので、ことに脉診を重視していることが特徴である。その詳細は成書に譲るとして、私の師である『岡部素道先生』は切診の一つであり、日本で発展した腹診を併用されていた。腹診との併用でより確実な証の決定が出来るようになった。さらに腹診の異常が消失もしくは軽減するような経脈中の経穴を尋ねて、その人の証に最適な経穴を選ぶことが出来るのではないかと私は考えたのである。

症例を示してみる。

〇網〇〇子　職業婦人
主訴：腹痛
既往歴：胃腸が弱くて、すぐに疲れたり、腹が痛んでうまく食事が出来ない。
現病歴：数日前から症状が出現する。いつも本院で治療を受けているので来院。
脈診：脾肺虚、
腹診：上腹部が冷えている。臍を中心に固い物があり、いつもより大きいかと思う
經絡診：脾経の地機を中心に圧痛を認める。

腹部の臍を中心として圧痛が地機の圧迫で軽減するので、証を脾虚とし、治療を開始する。
治療方針は脾虚として、
仰臥位で地機、足三里、手三里、孔最に刺針し、臍（神闕；臍中；齊中）に温箱で暖める。
腹臥位で胃倉、胃兪、至陽、天宗、脊柱の圧痛点に刺針後、点灸。お腹が温まり気分も良くなったとのことで終了する。

翌日、夕方来院し、治療を希望するも証決定の時、腹部の状態に変化が見られず、むしろ悪化している。翌日、消化器内科を受診するように指示する。後日談だが，イレウスで開腹手術を受けていた。その起こる要因に母親の脳血管障害で片麻痺になっていた。その対応や心配が引き金になっていた。
この患者はその後も１回／月は必ず来院して、悪いと２・３回治療で落ち着いている。あとは生活指導で特に冷飲食には十分な指示をしている。刺身、生野菜、果物、アイスや飲み物など冷たい物は厳禁である。

治療は、本治法として証による腹証の軽減をみる経穴の探索し、刺針、必要なら点灸。標治法としてその主なる主訴の軽減をとる。

本講演では標治法を一つ　腰痛を公開する。
要約すれば腰痛は膝や足、指もしくは股関節などに誘引されて起きるものとみている。

略歴
昭和４６年９月３０日
　明治鍼灸専門学校卒業
昭和４９年１月～５５年１２月
　北里研究所付属東洋医学研究所勤務
昭和５６年～
　はり・きゅう　丸山漢方堂　院長